

山形城三の丸跡（第 17 次）

遺跡番号 201-003

調査回数 第 17 次

所在地 山形県山形市旅籠町

北緯・東経 38 度 42 分 02 秒・140 度 56 分 02 秒

調査委託者 山形県村山総合支庁建設部都市計画課

起因事業 山形広域都市計画道路事業 3・2・5 号旅籠町八日町線（山形市七日町地内）

調査面積 1,339 m²

受託期間 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

現地調査 平成 27 年 5 月 25 日～11 月 12 日

調査当者 齋藤健（現場責任者）・板橋龍・阿部明彦

調査協力 山形市教育委員会、山形県教育庁村山教育事務所

遺跡種別 城館跡

時代 中世・近世

遺構 溝跡・土坑・柱穴・竪穴建物跡

遺物 土師器・須恵器・陶磁器・金属器・石製品・木製品（文化財認定箱数：54 箱）



遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

山形城は、馬見ヶ崎川扇状地に 14 世紀後半に最上氏^{まみがさき}の始祖斯波兼頼^{しかねより}により築かれたとされ、代々最上氏^{もがみ}が居城としてきた。17 世紀初頭には、最上義光^{よしあき}により 57 万石の大名の居城として相応しい規模の近世城郭として三の丸まで拡張され、現在の山形市街地の原型となった。

しかし、義光の死後に発生した御家騒動により最上氏は改易される。その後入封した鳥居氏は馬見ヶ崎川の流路変更工事や山形五堰の整備、二ノ丸の大規模な改修を行い、現在の姿が完成された。

17 世紀末以降山形藩は藩主が短期間のうちに度々変わり石高も徐々に減る。このことから、広大な城の維持は困難となり荒廃する。18 世紀後半の秋元氏入封時には、本丸は更地となり二の丸内も小規模な建物が散見するだけで、藩主の屋敷は二の丸大手門の外に置かれた。藩士の住居も三の丸東半分にとまとめられ、三の丸の大部分は農地となった。城郭の衰退に反比例し、城下町は紅花をはじめとする特産品を扱う富裕な商人が集住していたことや出羽三山参詣の拠点として大いに栄える。

山形城三の丸には 11 の口（門）があった。現在の済生館病院東側にあった七日町口は大手門として扱われた。七日町口内から二の丸大門までの道沿いには、18 世紀前半までは重臣の屋敷が立ち並び、幕末の水野時代でも家臣の屋敷が道沿いに立ち並んでいた。

明治維新により山形城は廃城となり、三の丸の堀や土塁の多くは撤去され、三の丸内にも庶民が住居を構え市街地化が進み、三の丸七日町口大手門跡には済生館病院が建設された。それに伴い、新道を建設する新しい都市計画も実施される。今回の調査起因事業である旅籠町八日町線も、この時期に作られた道路である。

しかし、モータリゼーションの発達により交通量が増大し、市街地での交通の停滞や事故の危険性が指摘され

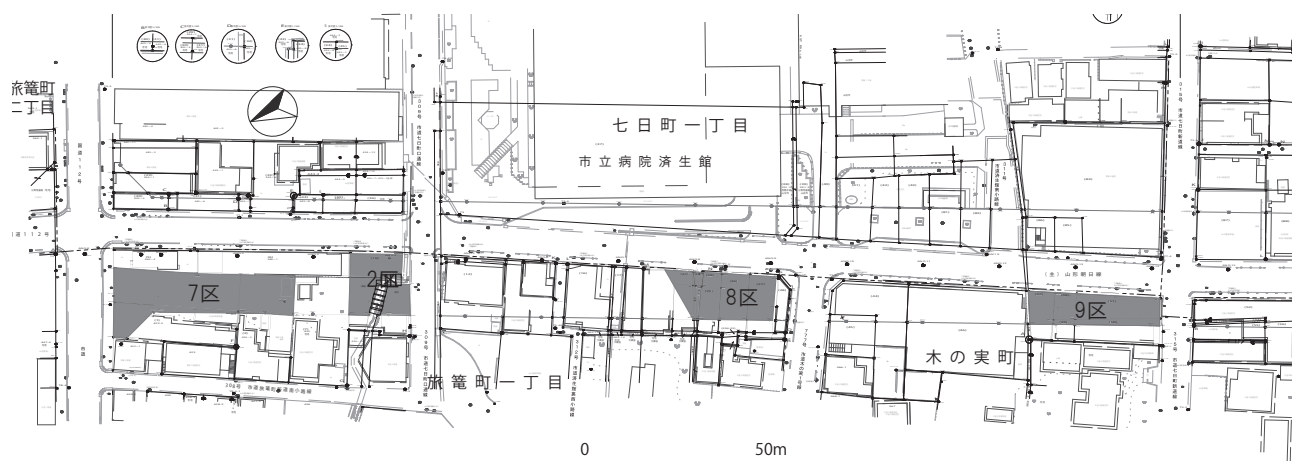


図1 調査区概要図



写真1 2区堀跡南西断面（東から）

るようになる。そのため、幹線街路の利便性を高めるために山形広域都市計画道路事業が計画され、その一環として旅籠町八日町線を拡幅することとなり、三の丸跡の発掘調査を実施した。事業区の内、昨年度は1,873㎡、今年度は1,339㎡で現地調査した。残りについては次年度以降、引き続き調査を行う。

遺構と遺物

今年度は、北から7、2、8、9区の4つの地区を調査した。7区は三の丸外の町家地区であり、2区が三の丸の堀跡で、5、8、9区が三の丸内部の武家屋敷地区である。

2区は昨年度も調査を試みたが、堅牢な建物基礎が残っていたこともあり十分な調査を行えなかった。そのため、本年度あらためて基礎を取り除いて調査を実施した。2区は現在の御殿堰で二分されており、地元の人の話では、この地区の御殿堰は堀跡のほぼ中央に埋め立て時に作られたという。調査で、その伝承が正しかったことが証明された。御殿堰で二分された片側の調査区では堀の南岸（写真1左部分）を確認できた。北岸については、建物の基礎工事で攪乱されて確認できなかった。堀



写真2 2区堀跡精査作業（北から）

の幅は15mほど、深さは2mほどである。堀底からは19世紀前半頃を中心とした波佐見産磁器片や将棋の駒などが出土した。堀は明治になって土塁を崩して埋め戻されている。

7区からは約4m四方の竪穴建物が1基検出された。棟持柱を持ち床面には焼土や炭化物が検出されたが、燃烧施設や年代を決定できる遺物は出土しなかった。また、19世紀前半頃とみられる波佐見産磁器片が出土した土坑からは、文字や絵画が線刻された砥石が出土した。

8区は、昨年度の5区の残りと合わせて調査を行った。昨年度検出した幅4m、深さ1mほどの南北方向の大型区画溝の続きを確認できた。溝は途切れており、突き当りは丸い川原石が積まれて護岸されていた。西方向には屈曲しないが、東方向は近代の攪乱により確認できなかった。溝からは五輪塔の空風輪^{くふうりん}が出土した。また、東西方向に並行する幅40cm、深さ20cmほどの道路跡の可能性が高い区画溝2本を検出した。さらに、7区で検出したものと同様の竪穴建物跡を2基確認した。1基は7区の竪穴建物とほぼ同規模だったが、もう1基は東西



写真3 2区堀跡完掘状況（南から）

方向に二倍ほど細長く、炭化物の集中部分が東側と中央部の2箇所にあった。また、他にも鉄滓や^{てっさい ふいご}鞆の破片が出土する深い土坑も確認できた。

9区は建物の基礎工事で深く攪乱を受けており、遺構の残存状況は良くなかった。現在の土地境界の下から、近世の区画溝が検出された。また、火葬骨を埋葬した木棺墓も検出されたが、遺物は出土しなかった。

まとめ

今年度の調査は昨年度に引き続き2、5区の一部、7、8、9区に対して実施した。

2区は三の丸の堀跡で、南岸面と底面を確認することは出来たが、北岸面の確認はできなかった。堀底からは江戸時代後期の遺物が出土し、明治以降に埋め戻されたことも確認できた。また、堀跡は幅14m、深さ2mほどとそれほど大規模なものではなかった。当センターが平成24年に実施した横町口と十日町口に近い第10次調査では、深さ8mほどであったが、山形市教委が平成20年に市立第七小学校敷地で実施した調査では、今回とほぼ同規模の堀跡が確認されている。このことにより、三の丸の堀は門周辺は深く広く作られ、その他の部分で



写真4 7区竪穴建物跡完掘状況（北から）



写真5 7区出土線刻砥石

は2mほどしかなかった可能性があるといえよう。

三の丸外の7区からは竪穴建物が1基検出された。似たような竪穴建物は8区でも検出されている。遺物を伴わないことから決定的な年代は断言できないが、古代のものとは覆土の状態や柱位置、趣きが異なるので、中世の可能性が高い。

三の丸内部の8区からは、昨年度検出された南北方向の大型区画溝の延長が検出され、突き当りには石組みがあった。年代については、昨年度の年報では18世紀ごろと示唆したが、山形市教委が実施した双葉町遺跡で三の丸構築以前とみられる大型区画溝との近似性を指摘され、同時期である可能性が高くなった。また、道路遺構と思われる東西方向に平行する区画溝2本を検出した。最上期初期には、三の丸七日町口と二の丸東門が直線道路で結ばれており、その道路の可能性もあり、今後絵図面や位置関係から慎重に検討を進める。

9区からは時期不明の火葬墓が検出されている。

残りの10、11、12区については、来年度以降調査を行い、昨年度と今年度の調査結果と合わせて整理作業を進めて報告書にまとめる。



写真6 8区道路遺構検出状況（北東から）



写真7 8区大型画溝完掘状況（北から）



写真8 8区大型区画溝出土五輪塔空風輪



写真9 8区竪穴建物跡完掘状況（東から）



写真10 8区竪穴建物跡完掘状況（東から）



写真11 9区作業状況（北から）



写真12 9区土地区画溝検出状況（東から）



写真13 9区火葬墓検出状況（北から）